

昭和初年2月1日 第3種郵便物認可  
平成21年5月1日発行(毎月一回)日発行  
俳句雑誌 沖 第40巻第5号



俳句雑誌[おき]

5  
月号

沖  
発行所

# 土筆野

能村 研三

土筆野に摘み敵来てはかどれり

不用意な言葉戻らぬ海市かな

雛の客葉銘の由来聞いてをり

あたたかや匠伝への菓子木型

## 郵便番号「四四四」

「四四四」は愛知県岡崎市の郵便番号である。岡崎市には「沖」の同人、会員も多くこの郵便番号はいち早く覚えてしまった。それと「四四四」という数字には忘れられないことがある。平成四年四月四日、岡崎市の徳川家康の菩提寺である大樹寺に先師登四郎の句碑へ睦み合ふごとし雨中の松さくらが、柴田雪路さんや羽根嘉津さんら愛知支部の皆さんのご尽力で建立開眼された日である。この日は、句碑の句にも相応しく、岡崎城のある岡崎公園のすぐ近くを流れる菅生川の河畔の桜も満開であった。この頃の登四郎は、八十歳を越えていたものの、とても元気だ、俳句総合誌に八十句、百句などという大作を発表していた時期で、この日も開眼式に臨むため坂巻純子さんや洲上千津さん北川英子さんと共に前日から岡崎のホテルに滞在していた。ホテルで朝食をとっている時に、熊本の同人、正木浩ユ二さんが亡くなったという電話が入った。

朧夜を覚まし走りの空荷貨車

春陰や蠟走らせし敷居溝

北開き笙献奏の神楽殿

WBC大会

イチローに神降りて来し桜南風

飛花落花スポーツ殿下の追頌碑

学習院・高田宮殿下の碑

古道具のオルガン奏ぶ復活祭

※一部「俳壇」発表句

正木さんは、癌で長く病んでいたが、「沖」では将来を期待されていた同人であったので、そのショックは大きなものがあった。正木浩一さんの忌日は平成四年四月四日で、「四四四」という数字は私にとって絶対に忘れられないものとなってしまった。今年の同人研修会および中部大会は、柴田近江新愛知支部長のもとに四月十八日に岡崎市で開かれる。十四年ぶりに「松さくら」の句碑に再会出来ることを楽しみにしている。

能村 研三



# 万の青片

林 翔

魂<sup>たま</sup>抜かるる快感春のベルリオーズ

遠すぎる墓地を思へり彼岸寒

大ぞらも万の青片花万朶

咲かむずる桜に触れて散るさくら

## 背くらべ

五月と言えば必ず憶い出して、心の中で唱う童謡がある。小学生時代に唱歌の時間に合唱した歌、「背くらべ」である。

柱の傷はおとしの

五月五日の背くらべ

粽<sup>ちまき</sup>食べ食べ兄<sup>にい</sup>さんが

測<sup>はか</sup>ってくれた背<sup>せ</sup>の丈<sup>たけ</sup>

昨日<sup>きのう</sup>くらべりや何<sup>なに</sup>のこと

やっ<sup>や</sup>と羽織<sup>えいし</sup>の紐<sup>ひも</sup>の丈<sup>たけ</sup>

柱<sup>むら</sup>に凭<sup>た</sup>れりやすぐ見える

遠<sup>とほ</sup>いお山<sup>やま</sup>も背<sup>せ</sup>くらべ

雲の上まで顔出して

てんでに背<sup>せ</sup>伸び<sup>のび</sup>びしていても

雪の帽子<sup>ぼうし</sup>を脱いでさえ

一は<sup>ひと</sup>は<sup>は</sup>や<sup>は</sup>つ<sup>は</sup>ばり富士<sup>ふじ</sup>の山

一番の最終行に「羽織の紐」とあるが、服装がすっかり洋風になった現代の子供には、何のことやらわか

ミサイルも話題に上野の花見かな

落花霏々夫<sup>せ</sup>病み妻病むその前を

夢の国おさらば朝を小綬鶏鳴く

水木咲き咲き満ち今日の憂ひ無し

玻璃窓の鳥糞親し菅巢期

大空へふくらむ愛よ櫻の芽

らないかも知れない。私の小学生時代（大正9〜14）には東京の小学校でも洋服の児は極めて少なかった。

社長令息のK君、画家令息のA君、歯科医令息のN君ぐらいが洋服で、他は皆、筒袖の着物に行燈袴、下駄ばきで登校し、下駄箱に入れてある運動靴に歩き替えるのだった。雪の日、朴齒の下駄の齒の間に雪が詰まってしまい、歩くのに苦労したことを覚えていいる。

粽は菓子屋で買うと高価なので、たまにしかたべられなかったが、栢餅は五月五日には必ず食べたし、その前後にもよく食べたと記憶する。

林 翔



# 蒼茫集



ふらここ

森岡 正作

ほつたらかし

千田 百里

速達の赤の眩しさ合格す  
昭和とは麻酔のごとし春の雪  
雛に逢ふ雛の高さに身を低め  
夜遊びを過ぎては雛に囁かる  
座るだけでよしふらここに父想ふ  
食道にすんと落とる春の雷

不死鳥物語

北川 英子

雪解村ポスト全身現れ完了  
マヨネーズによる出すぎや春一番  
鳥雲にそして不死鳥物語  
白酒や瓶のくびれにぐづりぬて  
草食系をのこの殖えて猟名残  
胡沙降るや鳥たち何処まで去にし

弥生明るし欄干のなき八橋も  
寛まさむと朴の芽すべる日照雨かな  
酔寝して春の嵐に論さるる  
駘蕩やほつたらかしの島点々  
春昼のトロンボーンに弱音器  
喪ごころをやしなふ水の温みけり

春スキー

河口 仁志

海底に眠る魚あり涅槃雪  
栄螺焼く島の裏まで醬の香  
毒舌のさもありさうな薬喰  
ピカソにも描かせてみたき海鼠かな  
投網する人も小舟もかげろへる  
地表とは違ふ浮力や春スキー

卒業式

大畑善昭

送辞答辞きびきび卒業式進む  
護摩の火を春呼ぶ色に上げにけり  
みづうみの上流で逢ふ岩魚釣  
みどり児の転んで起きて蝶の屋  
蒲公英やここがこの世の一浄土  
普門即一門の春曼荼羅図

反芻中

辻美奈子

青き踏む偶蹄類は反芻中  
恐竜の肋の下に春惜しむ  
ピンタ島ロンサム・ジョージ亀の鳴く  
水母その身のおほかたは春の水  
カトレアは夜明のごとく咲きにけり  
人類の進化のはじめ青き踏む

厩出し

安居正浩

高枝に鳥の来てゐる雛祭  
気ままなる仕丁が良けれ雛ならば

半身は風になりたる厩出し  
まだ浅き夢のつづきの春の雨  
薔薇の芽のすでに光は紅に  
弓道場がらんと花の散り込みぬ

伴奏譜

荒井千佐代

北開くる誰も住まざるちちの家  
浅春の屋根に乗せある砂袋  
如月の葬へ分厚き伴奏譜  
鳥の混む平らな礁二月尽  
雛まつり日矢は海申貫きて  
たつぷりとバジルバジリコ春深む

瘤

辻直美

連れ立ちてゆけば野遊ごころかな  
巣箱掛く小櫓の瘤に身をあづけ  
おぼろ夜の文体いはば朦朧体  
夫よもうかの鶯も来ずなりぬ  
喪の家も立替ふ家も芽吹くかな  
薔薇の芽やきりきりと子が髪を結ふ

# 潮鳴集



乱反射

内山照久

裸木や瘦我慢てふダンディズム  
警策をいたたく思ひしづり雪  
咳といふ己が存在廁かな  
エレベーター余寒の空気分ち合ひ  
めがね新調初蝶の乱反射

涅槃の日

佐久間由子

あをあをと北斗逆立つ追儼かな  
モノレール寒明け晴の発光体  
大灘の雲の重たき涅槃の日  
佐保姫の海風ならむ朝ぼらけ  
啓蟄や五感の動く気配して

雛の日

大沢美智子

待針の玉のうるみも雛の日  
潮鳴りは揺藍のうた吊し雛  
雛納めいちにち水のやうな空  
聖堂の絵硝子未完陽炎へり  
暁ひのテラス約束のごと初蝶来

複写機

小嶋洋子

風光る首都はダイヤモンドカット  
料峭のばねが電池をはね返す  
麗らかや二つ二つのカフェの椅子  
下萌や釦ささへる小さき釦  
複写機の内部もつともかぎろへり



入選一位  
地吹雪  
梶川智恵子

雪虫飛ぶたましひ色の綿抱き  
糸底の荒き手ざはり雪催  
奔放の枝々なだめ雪囲  
手ふるごと誰が手袋まだ枝に  
しんしんと雪一村の時紡ぐ  
風花や余生の駿馬長まつげ  
夕茜ハープ奏づや軒氷柱  
雪平の古きが親し七日粥  
女正月耳朶にも少し紅刷きぬ



大雪や陸封のごと今日も在り  
また一人「しばれますね」と無人駅  
こめかみを貫くしばれ外の一步  
雪女の吐息か梁きしみしは  
千畳の雪の田しんと石狩野  
地吹雪を真二つに立つ楡一樹  
吹雪く夜の人のかたちとすれ違ふ  
村の雪もらひひ大雪像の城  
氷像の化粧直しの鑿ひかる  
オホーツク統ぶ氷上の鷺身じろがず  
多喜二忌の魚くさき雪海に押す

# 沖作品



## 能村研三選

愛媛

玉井江吏香

籬の間のどこかひんやりしてをりぬ  
もう遠くなりし友だち籬あられ  
ふつくと白木蓮の美味しさう  
連翹や水音止まぬ家の奥  
こんなにも地上に近き幹に花  
曲るたび勢ひたちけり雪解川  
浅春の糸きりきりと絞り染  
包帯の指より春の鼓動きく  
やははれし鬼は父なり身を曲げて  
旅の夜の眠り誘ふ雪しづく  
凧糸に風の鼓動の力かな  
トンネルを抜けてトンネル春の雷  
つんつんと風をつついて辛夷咲く  
柔らかき大仏の背に春の塵  
春塵や人に三つの空気孔

千葉

峰 幸子

東京

七種 年男

愛知

近藤 敏子

海鳴りのいつしかやみし雪月夜  
鎌を研ぐ指に尖れり雪解風  
梅東風や礼に始まる射手の眉  
風不意に野焼きのあとの闇匂ふ  
連凧の三河晴れなる深さまで  
春寒の書庫に花袋の震災記  
無言てふやさしさのあり春時雨  
ちちははの涙が不思議卒園児  
春塵の書店はみ出すぞつき本  
村ぢゆうの顔が集まる合格子  
十和田湖の柑塙に鱒の流転かな  
雪しまき貫きしみ泣く家郷捨つ  
舟縁に植るむそぢの海女の笛  
栄螺舟足で櫓を漕ぐ岬日和  
弧を描き千瀉千畳むつが飛ぶ

東京

藤原はる美

千葉

鈴木 伸一

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

雛の間のどこかひんやりしてをりぬ

玉井江吏香

野澤節子の句に〈雛かざる一と間は紅の色あふれ〉という句があるが、雛の間の「紅の色」には誰もが心をときめかす。女ならば自らの遠い昔の色、男ならばその昔の新妻の色を、毛氈や桃の花、人形の衣装や雛菓子など、目につくかぎり濃く薄く紅に彩られた物ばかり。ぼんぼりの灯った宵は影さえも紅の色に染まる。七段飾りが飾られている雛の間は、赤い毛氈の色合いさらにはぼんぼりの雛明りも手伝って明るく楽しくしてくれる。しかしお雛様はとても綺麗でたおやかなのに、夜などは何となく怖く感じることもある。この句、何か常識を越えたところに一つの発見を求めているのが面白い。雛の間にいると明るく幸せそのものであるはずなのだが、それが逆の真理とでも言うか、何かひんやりしたものを感ずるというのも、人間が感じる正直な感覚でもある。玉井さんは、かつて近江の勉強会でお会いしたことを記憶しているが、今回の俳句コンクールでも良い成績を収めるなど今後の活躍に期待したい。

包帯の指より春の鼓動きく

峰 幸子

「春の鼓動」とは、美しい表現であるが、傷先が脈を打っているわけなので、実際はかなり痛いはずである。しかし、真っ

白な包帯で傷口を被い手当したあとをこのように俳句に詠めるのも詩的な感覚が無くては出来ないことである。脈うつ鼓動と共に、治癒のちからは次第に働いているのだろう。

風糸に 風の鼓動の力かな

七種 年男

「鼓動」の句がたまたま二句続いてしまったが、こちらの方は人間の体ではなく、風糸が震える音である。空へ吸い込まれる風が、細い糸から指先へ何かを伝えてくれる。握りしめた風糸で天に舞う風を手の加減により操る。風の鼓動を感じながら空へ通じる力といったものも実感する。

海鳴りのいつしかやみし雪月夜

近藤 敏子

都会で育った私などは、子供の頃、雪が降るととても嬉しかった思い出を持っている。大人になっても、殊に雪が降れば子供心に帰って遊びたくなったもの。まして、雪の降った夜、特に月が出ているとなると、何か童話的世界の中で遊んでいる感じである。まるで妖精でも出てきそうでもある。海鳴りもいつしか収まって、雪原は月の光で美しく煌いていた。

無言てふやさしさのあり春時雨

藤原はる美

饒舌であることが、人間のコミュニケーションの全てではない。時には無言であることもやさしさにつながる場合もある。所謂「空気が読める人」ということになる訳だが、「春時雨」の季語も絶妙である。春になって降る時雨のことだが、時雨とは、晴れていたかと思うと急に降りだし、やんだかと思うとまた降りだすというように、照り降り定めない通り雨のことで、「時雨」は冬の季語であるが、「春時雨」は春の季語。時雨という言葉には何かわびしさが漂うが、その言葉に「春」の一字が加わるだけで、暖かさや明るさ、清々しさなどまるで違った言葉となる。